

～今月の花木～



ビワ 枇杷

バラ科・常緑高木・西日本、中国原産

枝先に白い小花を密に咲かせる。翌年の6月ごろに熟す果実に比べ、花は非常に地味である。



クリスマス、お正月に登場する植物



クリスマスやお正月にはこの時期限定の飾り物が多く登場しますが、その基礎となる材料には植物が多く使われており、また、生きている植物そのもの自体が飾り物の対象になっているものもあります。古くから伝えられているものがほとんどであり、入手と加工のし易い植物材料が多く用いられてきたのではないのでしょうか。(※今月号は2008.12月号の再掲になりますので、ご了承ください。)

登場する植物はいろいろありますが、それぞれに用いられている意味、理由があり、我々の祖先はそれらをいろいろなものに見立て、意味づけしてきた結果が今日のクリスマスやお正月のお飾りに受け継がれています。今月号では、これらの意味や由来を中心にしてみます。

基本は常緑樹

西洋的なクリスマス、日本のなお正月ですが、飾り物に登場する多くの植物は常緑性のものが多いという共通点があります。常緑樹は冬でも青々としているので強い生命の象徴としての意味が両方にあります。落葉樹の葉のない枝(冬枯れ)は、死んでいるわけではないのですが、見た目が寂しいので古くから好まれてこなかったようです。色彩の共通点としては、「緑色に映える赤色」が基調となっています。クリスマスでは、ヒイラギの緑の葉と赤い実やポインセチアの葉の緑と赤の対比、お正月では、センリョウ、マンリョウの緑の葉と赤い実などが挙げられます。(但し、ヒイラギは後述しますが、赤い実のつくものは限られるので注意が必要です。)

クリスマスツリーは市販されている多くはプラスチック製ですが、たまに「本物の木のツリー」などと称して、モミの木やドイツトウヒなどが鉢植えて売られています。お正月の松飾りはマツの他にタケなどを用いた門松が正式ですが、マツの枝を玄関や門扉の両側につけ、輪飾りをつけた略式の門松も多く見かけます。

モミ、ドイツトウヒ、マツ共に共通しているのは「常緑の針葉樹」ということです。ヒイラギも入れると(常緑広葉樹ですが)葉先の痛い樹木が多いようです。

クリスマス、ツリーとは

クリスマスはキリストの生誕を祝うことが本来の趣旨ですが、日本では年中行事の一部として定着しており、その内容はクリスマスツリーを飾り、ケーキやチキンを食べて、プレゼントを交換することに集約されていることが多いようです。

クリスマスツリーはモミの木というイメージを思い浮かべますが、モミのほかにドイツトウヒの木が多く用いられることが多いようです。また、他のコニファー類も樹形が似ているため、クリスマスの時期になると飾りつけをしてある光景を見かけることがあります。

ツリーには必ず常緑樹を用います。「常緑」の常に葉を茂らせている姿は永遠をあらわし、キリストが与える永遠の命を象徴しているそうです。

ヒイラギの話

何故、クリスマスにヒイラギなのか?

その意味はヒイラギのトゲはキリストが十字架につけられる前にいばらの冠をかぶせられたこと、そのいばらをヒイラギの葉が象徴しています。赤い実、キリストが流した血、緑の葉は永遠の命をあらわしているそうです。

飾り物やイラストにはヒイラギがよく登場し、緑色のギザギザの葉に赤い実がなっているのを思い浮かべますが、「ヒイラギ」と名のつく植物全てではありません。

クリスマス用に「ヒイラギ」として赤い実をつけて出回っているものはヨーロッパ原産の「西洋ヒイラギ」(別名、クリスマス・ホーリー) もしく

は中国原産の「ヒイラギモチ」(別名、チャイニーズ・ホーリー、シナイヒイラギ)になります。この二つはヒイラギに葉が似るため「ヒイラギ」の名が付いています。モチノキ科のため、日本の「ヒイラギ」の仲間ではありません。

日本原産のヒイラギはモクセイ科で、クリスマスに登場する「ヒイラギ」のような赤い実はありません(初夏に黒紫色の実をつけます)。また、よく似た中国原産のヒイラギモクセイは、生垣などでよく見かけますが、雄木のみで実をつけることはありません。ちなみに両方とも秋に白い小花をつけます。また、葉のよく似る中国原産のヒイラギナンテンはメギ科で、黄色い花が春に咲き、黒紫色の実が秋になります。



ヒイラギモチ (モチノキ科)



西洋ヒイラギ (モチノキ科)



ヒイラギナンテン (メギ科)



ヒイラギモクセイ (モクセイ科)



ヒイラギ (モクセイ科)



ドイツトウヒ



モミ

お正月は縁起物

定番のお正月の飾り物といえば、注連飾り、門松などがありますが、用いている材料には縁起の良いものを用いています。とは言っても、我々人間が勝手に意味づけをして「これは縁起がよかろう」とこじつけている感は否めません。マツは常緑樹で冬でも青々としていることが、不老長寿につながり、また、神が降りてくる木として縁起の良いものとされてきました。門松は関東でよく見かけるものはタケばかり目だっていますが、その名が示すとおり本体はあくまで「マツ」であります。また、門松の別名を「松飾り」とも言います。タケも冬季に青々として、すくすく育つイメージから縁起の良いものとされています。門松にはウメの枝や、荒縄で編んだ梅の飾り物をつけて「松竹梅」を表しているものもあります。

お正月の飾り物、門松、注連飾り、鏡餅などを飾る期間ですが、地域によって差もありますが、概ね以下の通りです。喪中の場合は通常飾りません。

●飾りはじめ・・・12/13～12/28、12/30

(12/29は「二重苦」また9の末日でもあるので、「苦待つ」に通じ、12/31は「一夜飾り」といって神をおろそかにする言い伝えがあり、飾りません。)

●飾り終わり・・・1/7

(元旦から1/7までを「松の内」といい、1/7の朝に七草粥を食べてから外すのが、良いそうです。)

飾り物以外にも、お正月の縁起木として、センリョウ、マンリョウ、ナンテン(難転...あて字)といった木もありますので、それらも昔からよく飾られてきました。



門松 (関西)



門松 (関東)

左の写真に、関東と関西の代表的な門松の写真を並べてみました。三本組みの竹を中心に若松を周囲に配する構成は同じですが、関東はその下は藁で巻いておしまいという形態に対して、関西では、下部を割り竹で巻き、前面に葉牡丹を添え、さらに豪華になると梅や南天、熊笹なども添えられます。門松は関西のほうが派手な感じですが、門松一つに地方色が薄れた時代と言われますが、門松一つにしても地方色は残してゆきたいものです。

門松にも地域差はある



一両、十両、百両、千両、万両



お正月の縁起木としては、センリョウ(千両)、マンリョウ(万両)は特に有名で、いかにも縁起が良さそうな名前がついていますが、百両以下も別名になりますが有りますので紹介いたします。カラタチバナ(唐橘)は「百両」、お正月の寄せ植え材料によく使われるヤブコウジ(藪柑子)は「十両」、アリドオシ(蟻通)は「一両」の別名があり、「千両、万両、有り通し」と称してお正月の縁起物にする地方もあります。



マンリョウ (万両)



センリョウ (千両)

しめなわ
注連縄
社寺などにあるものと同じ意味で、俗界と神聖の境、結界の意味がある。

ゆずりは
譲葉
古い葉が新しい葉に世代を「譲る」ように見えるため、子孫繁栄の象徴。

やぶこうじ
藪柑子
千両、万両と並び、正月の縁起木とされる。別名、十両。山の幸でもある。

こんぶ
昆布
喜コンブ。海の幸。

しで
紙垂
四手とも書く。聖域を表す印。

いなわら
稲藁
稲作文化とのかかわりの象徴。



関東地方 注連飾り

この辺りは、扇は上へ末広がりのイメージ、めで鯛や小判、海老など縁起の良さそうなもので構成されている。この辺りの素材はプラスチック製がほとんど。

だいたい
橙
代々栄える。

ねまつ
根松
根付くマツ。根が付いている。

うらじろ
裏白
シダの葉っぱ。裏が白なので、裏白。必ず裏面(白い面)を表にする。潔白。

ホンダワラ
馬尾藻
海藻で米俵型の気泡をよくつける。実にも見えるので、実がなる意味。海の幸でもある。

お正月の注連飾り、構成図

左の写真と説明は、お正月に玄関先によく飾る注連飾り(関東型)の構成の説明です。安い物ですと、ほぼ全部がプラスチックやビニルなどで出来ていますが、正式には自然素材で作られるのが本当です。

左の写真の注連飾りはプラスチック部を除き国産の自然素材で作られている、お飾りとしては正統派なものです。値段は高めですが、安い物とは全然質が違います。

注連飾りには地方によって様式に差があり、左と下の写真を比べても関東と関西では様式が異なっているのが分かります。注連飾りに関しては関東のほうが、派手な印象です。



関西地方 注連飾り

当社では障害者、親と暮らすことが出来ない子供たちの施設(社会福祉法人)に皆様から頂いた書類の使用済み切手等を使い、支援活動をしています。